

じている」(現代世界憲章 2) からである。

このように、教会がその使命を果たそうとするとき、信徒の働きなしには何もできないことが明らかとなる。したがって信徒に対する要求は、「この呼びかけに対する答えを、司祭、修道者といった人たちだけにまかせようなことがあってはなりません」(信徒の召命と使命 2) という控えめな表現だけでは不十分であって、「いままでも無関心であることは決して許されていませんが、今日では非難されるべきことなのです」(同上 3) という強い言葉で表されるのである。すなわち、「信徒も」働くとはいふレベルを超えて、「信徒が」働くようにならなければ、教会はキリストからゆだねられた使命を果たすことができないのである。それは、現代世界が「信徒でなければほとんど立ち入ることのできない活動分野を果てしなく拡大しているだけでなく、信徒の賢明な配慮を必要とする新しい課題を提出している」(信徒使徒職教令 1) からであり、「キリストの教会は信徒を通して、世界の多様な分野で、希望と愛のしるしであり泉として存在しているから」(信徒の召命と使命 7) である。したがって、「聖職位階とともに、真の意味の使徒団が存在して活動しなければ、教会は真に建設されたのではなく、十分に生きていない。また、人々の間におけるキリストの完全なるしるしでもない。確かに、行動的な信徒が存在しなければ、福音は、ある国民の天性や生活、またその働きの中に深く浸透することはできない。したがって、教会の設立当初から、成熟したキリスト教信徒団が構成されるように、特に注意しなければならぬ」(教会の宣教活動に関する教令 21)。

(欠くことのできない司牧者の役割)

教会が「救いの普遍的秘跡」として世に奉仕するとき、その第一の担い手は信徒である。信徒の世における奉仕が真にキリストの業を受け継ぐものとなるためには、キリストのいのちを豊かに受けなければならぬ。より広範囲にわたりより大きな困難をともなう奉仕を担うためには、真に人間を生かす言葉やわざが必要となる。生気を失った言葉やわざは、生きる力とはならないからである。

司牧者は、世を「裁くためではなく救うために、奉仕されるためではなく奉仕するために」(現代世界憲章 3) 生きる働き手のために存在し、弟子たちの足を洗われたイエスの姿に倣い、自分を無にし、僕となって(コリント 2: 7) 働くことによつて、その役割を果たすことができることを忘れてはならない。司牧者の奉仕とは、「自分たちの奉仕が根本的に神の民への奉仕に向けられていることを認めなければなりません」(信徒の召命と使命 22) とあるように、働きの手である信徒がより豊かなキリストのいのちを受け取るための奉仕である。「あなたがたにゆだねられている、神の羊の群れを牧しなさい。強制されてではなく、神に従って、自ら進んで世話をしなさい。単しい利得のためにではなく献身的にしなさい。ゆだねられている人々に対して、権威を振り回してもいけません。むしろ、群れの模範になりなさい」(1ペトロ 5: 2-) という言葉が実行されるころには、豊かな実りが約束されることだろう。

このように、教会の基本的なあり方を明確にする中で信徒奉仕職をとらえ、同時に、信徒・修道者・司祭すべての奉仕の位置づけを再確認することも必要となるだろう。